備陽史探訪

記念60号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL(0849)53-6157

『備陽史探訪』第六〇号発刊によせて

名誉会長　神谷　和孝

会員の皆様に会報『備陽史探訪』第六〇号をお届けします。

今まで会報が届いても、どんな内容のことが載っているのかが楽しみで、それが何号かということは余り気にかけていませんでした。

しかし、事務局から記念号を発行するにあたって、一つのけじめとしての感想を求められると、もう会報を六〇号も発行するにいたったのかと、改めてその意義の重さ、大きさが心の中にズシンと感じられました。

手許にある会報の第一号から五九号を改めて見ていると、「備陽史探訪の会」創設以来から現在までの当会のたどってきた道程の様々のことが、まるで走馬燈の如く次々に胸に去来いたします。会報が、創立以来十三年の当会の歴史を収縮して物語って呉れているような気がします。

会報の創刊以来しばらくは、半ペラの西洋紙に手書きの原稿をそのまま印刷したもので、中にはスキーの滑り方が全ページを占めるというものもあり、今の会報とは比較出来るものではありませんでした。

しかし、内容も体裁も貧しかったけれども、休日を返上して会報を印刷していた私達は、胸に熱い思いがありました。いつかキチンと体裁の整った会報を発行したい。そんな会報を発行出来る会を作りたいと。

現在、例会の参加者の顔ぶれを見ても、失礼ですが、すぐに名前が浮かんでこない方も多く、当会の創立時のことを御存知ない方も多いと思いますので、少し紙面をかりてそのことを書きたいと思います。

この会の誕生は、何と言っても、私と現会長田口氏との出逢いだと思っています。

当時、田口会長は同年齢の仲間数人と「ユースト・マップクラブ」というグループを結成し、サイクリングで福山周辺の遺跡を主体に探訪してまわっていましたが、本格的に歴史研究グループを結成したいとの夢でギラギラ燃えているような印象を、最初の出逢いで受けました。その歴史グループの顧問として是非にとの話で、当時若い人達と歴史研究グループを作って勉強を進めていきたいと願っていた私は、考えることもなく田口氏の申し出を引き受けました。

その時、田口氏はまだ高校生でした。田口氏が大学を卒業するまでの四年間の中断がありましたが、田口氏と私を核にしたグループの夢は、次第に現実のものになってきました。

「一人でも多くの方と現地に足を運んで歴史を学ぶ」と言う備陽史探訪の会の原点を理解して下さる方が次々と入会して下さり、当会発足十周年記念を祝したときには、会員百人を越える、県下でも注目される歴史研究グループに成長していました。

会が発展するにつれ、会報もそれなりに変貌をとげてきました。内容も深まり、手書きから印刷所で印刷されるようになり、ページ数も増え、堂々とした体裁に成長し、次回の会報を心待ちにして下さる方が増えてきて、編集する者にとっても、やり甲斐のある仕事になってきたと思います。

会報の内容をもう少し掘り下げて見ると、以前に比較して（私が会長をしていた期間と考えていただいて結構です）かなり学問的・アカデミックになってきたと思います。そのことは会の成長を意味します。

会が発展して行く中で、会の進むべき道を、少々会員が減っても学問的に深めたいと願う方がいましたが、あくまでも原点の「一人でも多くの方に」と、軌道修正を拒んで、会の発展を主眼に十周年を迎えました。

しかし、十年を越えて、これから会がたどる道は、会自体が学問的な深まりを目指すことしかないのではないかと考えました。そのためには、私の乏しい力では無理だと感じて、郷土史研究では誰しもが認めるオーソーリティーの田口氏に会長をバトンタッチした訳です。

田口氏になってからの三年で、当会の活動の中味が大きく発展したと思います。そのことは会報の記事内容からうかがうことが出来ます。

そう考えると、会報『備陽史探訪』と会誌『山城志』は当会の顔であり、活動の中味を推察するバロメーターでもあると思います。

最後に六〇号発行にまでこぎつけたスタッフの皆様方の御努力と、暖かく会の発展を見守り、協力を惜しまれなかった会員の皆様に心から感謝の念を表したいと思います。

唇を亀に咬まれた男の話

会長　田口　義之

読んで退屈しない古典の一つに、『今昔物語』がある。平安時代末期の成立と言われる説話集で、約一千の説話が収録されている。内容は、大きく仏法談と世俗談に分かれ、前者には高僧の伝記や寺社の縁起など、後者にはあらゆる地方の貴族から庶民までの老若男女を巡る逸話を集めている。

特に「本朝世俗部」と題した世俗談には高校の教科書にも出て来る『受領ハ倒ル所ニ土ヲ摑メ』で有名な信濃守藤原陳忠の話や、芥川龍之介の小説『芋がゆ』のもととなった「利仁の将軍若き時京従り敦賀に五位を将て行く語」などお馴染みの説話が多い。

限られた史料しかない平安時代にあっては、この物語の存在は貴重である。「猫怖じの大夫」（大蔵の大夫藤原清廉猫に怖るる話）の主人公藤原清廉は、石母田正氏の古典的名著『中世的世界の形成』で活写されている「伊賀国の猛者」藤原実遠の父で、実在の人物である。また、巻二十三に見える平維時と同致頼の合戦譚なども当時の貴族の日記に現れ、事実と確認されている。このように今昔物語に収録された説話には、他の史料で裏が取れるものも少なくなく、平安時代の歴史、特に武士や一般庶民の生活を探るためには、なくてはならぬ書物となっている。

ところで、この物語には備後を舞台とした、一つの注目すべき説話が収録されている。それが表題に掲げた「唇を亀に咬まれた男の話」（原題は『大蔵大夫紀助延の郎等唇を亀に咋るる語第三十三』）である。余り馴染みがないと思われるので左に一部を現代語訳で紹介しておく（小学館版完訳日本の古典三二『今昔物語集』本朝世俗部三より）。

「今は昔、内舎人から大蔵丞になり、後には従五位下に叙せられて大蔵大夫と呼ばれた紀助延という者がおった。若いときから米を人に貸し、利息をとって返却させたので、年月がたつにつれ、その量が重なり、四、五万石にもなっていた。そこで、世間ではこの助延に万石の大夫とあだ名をつけていた。

この助延が備後国に行き、用事があってしばらく逗留していたが、ある日浜に出て網を引かせていると、甲羅が一尺ほどもある亀を引き上げた。助延の郎等たちがそれをいじめてもてあそんでいたところ、中に年五十ぐらいの剽軽者がいた。いつもたいそう見苦しい悪（ふざけ）を好んでする男だったが、そのためであろうか、この男は亀を見付けるや、『そいつは、逃げたおれのもとの女房の奴だ。ここにいたのか』といって、亀の甲羅の左右をつかんでさし上げると、亀は足も手も甲羅の下に引っ込め、首もすっぽり引き入れたので、細い口だけがわずかに甲羅の下に見える。この男はさし上げて幼児に『高い、高い』をするようにして、『亀来い、亀来いと川岸で言ったときに、どうして出て来なかったのだ。長いことお前さんが恋しくてならなかったのに。ひとつ口を吸おうな』と言って、細く突き出た亀の口に自分の口をくっつけ、わずかに見える亀の口を吸おうとした。そのとたん、亀はだしぬけに首をさっと出して、男の上下の唇に深くかみついた。

引き放そうとしても、亀は上下の歯を食い違えてかみついているのでますます深く食い込み、どうして放すものではない。その時、男は手を開き、くぐもり声で叫んだが、どうにもしようがなく、目から涙をこぼして…（下略）」

この後、話は男の唇から亀の口を離す様子が面白おかしく紹介されているが、ここで問題にしたいのは、「スベキ事有テ」「備後ノ国ニ行」き、しばらく滞在したと言う、大蔵大夫紀助延である。

彼はどんな用向きで備後にやって来たのであろうか。

もちろん、大蔵省の役人であった彼は、役所の用事で備後に下向したということも考えられる。しかし、既にこの時代、中央の官僚機構は弛緩し、国家の役識は金穀で売買される時期になっていた。助延も後に従五位下に叙され、「大蔵大夫」（○○大夫の称は売官によるものが多い）と呼ばれたというから、謹厳な役人像を想定するのは無理である。現にこの説話によれば、助延は若いときから米穀を人に貸して利子を取り、「万石ノ大夫」と呼ばれたとある。本職は別にあったと解すのが無難であろう。

もし、助延が「米ヲ人ニ借シテ、本ノ員ニ増テ返シ得」という、今で言う高利貸のような商売をしていたとすれば、備後に借米の取り立てに来たということも考えられる。けれども、都を生活の拠点としていた彼が、わざわざ備後の人にまで米穀を貸すとは考え難い。それよりも、備

後に彼の土地があったと考えたい。助延が利に聡い商人であったとすれば、「四、五万石」もの米穀をそのまま遊ばせておくとは思えない。当時のことだから土地に投資したはずである。

ここで、備後、特にその沿岸部の遺跡や文化財を見てみると、意外にも、「紀氏」一族の痕跡が点々と残ってくるのに気付く。

先ず注目しなければならないのは、福山市蔵王町に残る国指定史跡『宮の前廃寺跡』である。同寺跡はかつて「海蔵寺跡」と呼ばれていた奈良時代から平安時代にかけての古代寺院の跡で、昭和二十五、六年の発掘調査で四枚の文字瓦が出土し、その内の二枚に「紀臣和古女」「紀臣石女」の文字が刻まれていたのである。

この文字瓦については、従来、備後国司に任命された紀氏との関連が推測されていた。すなわち、歴代の備後国司の内に、宝亀十一年（七八〇）に任命された「紀朝臣真子」との結び付きが考えられたのである。しかし、この説には難点がある。文字瓦には「紀臣」とあるのに対し、真子は「紀朝臣」である。「朝臣」と「臣」ではその社会的地位に雲泥の違いがある。天武天皇が定めた「八色の姓」のうち「朝臣」は上から二番目に位置するのに対し、「臣」はその六番目の比較的低いランクの姓である。「紀臣和古女・紀臣石女」は中央貴族の出身ではなく、在地の豪族と考えたほうがよい。

紀氏一族が備後の沿岸部に勢力をもっていたとする説は、別に突飛な考えではない。紀氏は、古代以来海と深いかかわりを持った豪族で、『日本書紀』等にも、五、六世紀、大陸との交渉に活躍した、多くの紀氏の名が見られる。瀬戸内海の中央に位置する備後に、紀氏が拠点をもっていたとしても何の不思議もないのである。

『今昔物語』の紀助延もこの備後の紀氏に連なる者であったのではあるまいか。たとえ、そうではなかったとしても、備後に紀氏の一族が居住していたからこそ、「スベキ用有テ」備後にやって来たのであろう。

備後と紀氏との関係は、中世鎌倉時代になっても途切れることはなかったようである。元応三年（一三二一）三月、あの国宝明王院（当時は常福寺）の本堂を再建した人物こそ「紀貞経」、すなわち、紀氏の一族であった。

備後と紀氏の一族、改めて考えてみたいテーマのひとつである。

秋の一泊旅行のコース決定！

神有月に遥かなる古代の浪漫を探し求めて

爽やかな十月。恒例の一泊旅行の探訪地が決定しました。

まずは、ただひとつの神有月（かみありづき）の国、神々の集う出雲（いずも）国です。

悠久の時を重ね、地下に眠り続けた青銅器が出雲に蘇ったのは、ちょうど十年前のことでした。

三五八本という膨大な数の銅剣の発見、さらに二年後の、銅矛一六本、銅鐸六個の出土は、考古学の常識を根底から覆すものでした。

この発見が、一体どれだけの学説を葬り去ったことでしょうか。

古代出雲は、いま「神話の国」から「確かな手応えのある古代国家」へと大きくイメージと変えようとしているのです。

考古学史上、不滅の金字塔となった、あの驚愕の『荒神谷遺跡』が、この秋あなたをお待ちしています。

ふたつめは伯耆（ほうき）国です。

神の山として古代から崇められてきた大山。その裾野の淀江町が、一躍ときの町になったのはほんの三年前のことでした。

平成三年の四月、日本最古の「彩色仏教壁画発見」のニュースが全国を駆け巡ったのです（一日に発見）。

あの法隆寺とならぶ白鳳期の壁画など、日本中、他のどこを探してもありません。

特に有名になった『神将』や『天衣』をはじめとして、「淀江町歴史民俗資料館」には、壁画の実物が数多く展示してあります。

古代、伯耆国は輝いていたのです。『上淀廃寺』の白鳳ロマンが、あなたの眼前に鮮やかに広がります。

観光バスが決して訪れることのない「荒神谷遺跡」と「上淀廃寺」をメインとする、備陽史探訪の会だけの価値あるツアーです。

＜その他の探訪予定地＞

大山寺、大神山（おおかみやま）神社奥宮、岩屋古墳、和鋼博物館（安来市、新築）、松江城、出雲国府跡、八雲立つ風土記の丘、八重垣神社、神魂（かもす）神社など。

＜実施要項（仮）＞

最終決定は次回案内に掲載します。

日程　十月一〇日、一一日（確定）

定員　五〇名

費用　二万五千円まで（予価）

申し込み予約　電話による仮予約を六月六日（月）より開始いたします。

費用等の正式決定後、振込用紙を送付。入金後に正式申込みとなります。

山桜の中

副会長　山口　哲晶

空がかすみ始めるころになるとまい年のように山に入る。山のあちこちに咲いている山桜に出会うためである。山桜の葉は赤っぽいのもあれば緑色もあり、花も白、うすくれない、とある。満開のもあれば、これからというのもある。山桜はいちどに咲きそろわない。山の東と西、南と北では咲く日がそれぞれずれており、しかも木によって咲く日がちがっている。

山桜を眺めていると「秘スレバ花、秘セネバ花ナルベカラズ」といった世阿弥の『風姿花伝』の一節が思い起こされてくる。花とはもちろん直接的な意味ではなくて、世阿弥は能を花にたとえていっているのである。

『花鏡』に「動十分心、動七分身」という一節がある。観客の目に映っているのはあくまでも演能者の身体動作であるが、それが七分であれば当然、観客にはそれだけしか見えない。しかし、一方、演能者が七分の身体動作にたいして十分の心を働かせるなら、その差の三分が観客には直接見えない余情的風趣としてただようことになる。これは「秘スレバ花」と同じことである。

色が淡すぎて空に溶けてしまいそうな山桜を眺めていると、いつも「秘スレバ花」と能を舞っている世阿弥の姿が幻のように浮かんでくることがある。

思えば中世は貴族から大衆に至るまで無常観に支配された時代だった。吉田兼好は世の無常を詠嘆し、さらに無常はこの世の実相であることを根本に『徒然草』に編んでいる。

山に入るとこちらの世界を凝視している兼好の姿が見えるときがある。

また、

「朝に死に、夕に生きるゝならひ、たゞ水の泡にぞにたりける。不知、生まれ死ぬる人、何方より来たりて何方へか去る。また不知、仮の宿り、誰が為にか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。その、主と栖と、無常を争ふさま、いはゞあさがほの露に異ならず。或は露落ちて花残れり。残るといへども朝日に枯れぬ。或は花しぼみて露なほ消えず。消えずといへども夕を待つ事なし」

この詠嘆的無常観を著した『方丈記』の作者鴨長明は、日野の山奥に閑居しながら、自ら結んだ庵に疑問を投げかけ、そこに棲む自分にも疑問を投げかけている。方丈とは四畳半の広さである。長明はそこで社会を捨てて自己を確立しようとした。外と自己を遮断することで自分を深めていった。そしていったんは閑居生活に充足をおぼえながら、最後にはこれが本当の自分の在りかたか、と疑問を投げかけている。

「世を遁れて、山林にまじはるは、心を修めて道を行はむとなり。しかるを、汝、すがたは聖人にて、心は濁りに染めり」

山の奥に分け行っていくと時折小さな庵で、自己分析と自己嫌悪に悩む長明の姿を見ることもある。

今年の春も山桜が豊富だった。ある日、山桜を眺めていたら淡い花弁の散る中を「無常だ。無常だ」とつぶやきながら足早やに通り過ぎる僧形の人にであった。西行だった。

「花にそむ心のいかで残りけむ捨て果ててきと思ふ我身に」

ふりかえると、その姿は花ふぶきの中にかすんで、やがてこつぜんと見えなくなった。西行とのこんな出会いもある。

山桜が咲きはじめるとあの淡い色あいに余情を見、その奥に中世の無償の精神を想う。

「去年盛りあらば、今年は花なかるべき事を知るべし」（『風姿花伝書』）

山桜は時が来れば咲き、やがて散っていく。こちらはただそれを眺めているだけである。

やがて木々の緑が深まっていく山あいの道をしぐれ雨にうたれながらとぼとぼ歩く雲水姿の山頭火に出合うことになるだろう。

古墳研究部会主催

古墳講座のご案内

いよいよ、この四月二日から待望の古墳講座が開講しました。

第一回は「日本の古墳文化―備後の古墳を通じて―」と題して、網本副部会長が講師を担当しました。

内容はとてもわかりやすく、また、最新の学説もふんだんに紹介されています。

この日、とくに興味を引いたのは「前期古墳の地域性」ついでで、埋葬頭位が北頭位と東西頭位におおまかに二分されるというものでした。

また、資料には「古墳カード」もついており、まさにいたれりつくせりの講座になっています。

次回は、六月四日（土）の午後七時より中央公民館で開講します。どうか奮ってご参加下さい。

なお、資料代として百円（実費）徴収させていただきます。

土器の年代を明らかにする

篠原　芳秀

遺跡の発掘調査では、建物・溝・墓などの遺構と、土器・石製品・金属製品などの遺物が見つかる。しかし、これらがいつの時代のものであるかが分からないと、歴史を組み立てることは困難である。そこで、これまでにも年代を知るための様々な研究がなされてきた。中でも土器を対象としたものは、日常的に使用されるのでほとんどの遺跡から出土し、その量も多く、年代の進行と共に異なった特徴がみられることなどから、最もよく研究が行われている。個々の土器、あるいはまとまりとしての土器群の時期が明らかにできると、これらを年代順に並べ、土器の変遷を示す編年案が作成される。現在、多くの編年が提示されているので、年代の不明な土器は、この編年に照らし合わせて時期を推定することができる。ただ、すべての時期、すべての地域における土器の編年が明らかにされているわけではない。

広島県における平安時代から室町時代（九世紀から一六世紀）までの土器はどうであろうか。出土している土器は、在地産と考えられる土師器と須恵器が大半を占めているが、地域によって様相がかなり異なっている。私見であるが、現時点における県の東南部、西南部、北部に分けた、椀・皿・杯（皿の内側が深いもの）についての概略は、つぎのようにまとめられる。

(一)　東南部

福山市のザブ遺跡（津之郷町）・草戸千軒町遺跡（草戸町）、尾道市の尾道遺跡（市街地一帯）、府中市の備後国府跡（元町ほか）などに豊富な資料があり、県外で生産されてもたらされた焼成年代の明らかな土器が共伴している資料も多数あることから、すでに編年が行われている。これらを参考にすると、九世紀は須恵器が主であるが、その後はほとんどが土師器で、一〇世紀は杯、一一世紀後半から一四世紀までは椀・杯・小皿が組み合わさり、一五世紀・一六世紀は大皿・中皿・小皿のセットになっている。また杯と皿は、回転台を使用して成形され、底部の切り離しは、一一世紀・一二世紀に回転糸切りのものが半数近くを占めるが、基本的には回転ヘラ切りである。なお椀は、年代の進行と共に小型化し、製作技法も簡素化している。

(二)　西南部

広島市の権地古墳（安佐南区祇園町）・国重城跡（同区沼田町）・池田城跡（佐伯区五日市町）・東広島市の(伝)安芸国分尼寺跡（西条町）・鏡西谷遺跡（同）、小越窯跡（志和町）、安芸郡の畝観音免第一号古墳（海田町）、竹原市の高崎城跡（高崎町）などの様々な資料があるが、編年案を組み立てるには個々の分量が少なく、印刷物となった編年は提示されていない。資料を繋いでみると、九世紀から一二世紀前半まではほとんどが須恵器で、杯・皿から椀・杯の組み合わせに変わっている。いずれも回転台による成形で、椀の一部に底部を回転糸切りしたものもあるが、基本的には回転ヘラ切りである。そして、その後はほとんどが回転台を使用して成形した土師器になり、一四世紀までは杯と小皿が組み合わさり、一五世紀・一六世紀はセット関係が不明なものの、大皿と中皿と小皿が出土している。また底部の切り離しは、一五世紀までは基本的に回転糸切りであるが、一六世紀には回転糸切りが主体の遺跡と回転ヘラ切りが主体の遺跡がある。

(三)　北部

三次市の羅漢遺跡（和知町）・加井妻城跡（粟屋町）や高田郡の山田積石塚（甲田町）などの資料があるものの断片的で　土器様相の変遷は明らかにできていない。ただ、土師器の底部は回転糸切りのものが多く概ね西南部の状況と同様なものと思われる。

このように、広島県における平安時代から室町時代までの土器については、その様相がかなり明らかになっているところもあるが、まだまだ不十分である。もう少し個々の土器の詳細な年代を明らかにできれば、地域ごとの歴史の流れや同時期における地域相互の関係、まとまりとしての地域の広がりなどが考えられるようになり、ダイナミックに歴史を構築することが可能となる。たとえば、ある特定の時期の土器様相が県下全域で明らかになると、特色ある土器群ごとに区分けすることにより、それぞれが経済的あるいは政治的な関わりを示す範囲として捉えられ、地域と地域の結びつきの程度なども知ることができる。

一口に土器の年代を明らかにするといっても、これまでに紹介されている多量の資料の再吟味と、これから新たに得られる資料を取り込みながら、県内は元より、周辺地域の資料とも比較検討しなければならない。気の遠くなるような作業ではあるが、得られる果実は大きいので、一歩一歩着実に進めたいものである。

〝ふるさと考〟

「今年も蛍が見たい」

石井　良枝

人生の中途で日常の暮しの土台を変えようとした時ー義母との突然の別れー後に続く暮しの変り方を深く考えるゆとりは私にはなかった。

とりあえずそれまでの二十年間、無我無中で走り抜けて来たとも思える仙台の地を去り、ここ福山の地に帰往することにしたのです。その暗中模索の頃に「備陽史探訪の会」に加わり、若いエネルギーに満ちた集団の一員に身を置きー福山の地を知りたいーまるで旅人の心情で暮していた頃の自分がみえてきます。

十年一昔。私が鎮守の社の清掃に年月を重ねて来た今、社のみどりを守ることの大切さが迫ってきます。大きなケヤキの根の室に、野ウサギが隠れ住み、高い枯木の室の中にはムササビが住んでいました。

社の前を流れる川岸の竹藪の中から、カワセミが瑠璃色の身を翻えして川面をめがけて飛び立つ姿を目にしたものです。

近くの山裾の道端には、春夏秋冬と四季折々に、同じ処に同じ野辺の草花が日だまりに向って咲いていました。

ショウジョウバカマ・ジジババ・スミレ・タンポポ・ネジバナ・ホタルブクロ・ホトトギス・セキショウ・カンゾウ・アザミ・オミナエシ・ワレモコウ…。

「昔は、このあたりに沢山リンドウの花が咲いていたんだョ」

七年後の秋、小祠の祭の日に山の斜面の雑木の中で、細くかたい軸の先に小さな紫の花が咲いていました。家の庭先でリンドウが芽を出しています。四本に分れて…。

こと数年来、突然見知らぬ人が、「我家の祖先のルーツを知りたい」と云って訪問されることがあります。そしてそれぞれの祖先が生きた証の墓地を探して帰って行かれます。

いつからか故郷を遠く離れていた人が、世代の節目を迎えた時ふるさとでの幼い日の記憶の中にあるーわが村・わが町ー風物を懐かしみ、その追憶の中に存在している光景ー人生の原体験ーを探し求めてその土地を訪れる＜探訪＞されるのでしょう。

かつて祖先が親がそして幼い自分が住んだ故郷は、そのまま＜ふるさと＞であり得たのでしょうか。

農耕を中心に土着した暮しを受け継いで今を生きる人達の村や町の共同体としての力（知・情・意）が現存している今、産土神としての鎮守の社に、生きとし生けるものの生命を守るため老若男女の持てる力を共に出し合い、勇気を持って二十年目に向けて一歩を踏み出さなければ…。

石段に腰をおろして

「加茂は日本一ョ」と

これこそ土着の人のつぶやきの声。

道で出逢った女の子が

「神様！」と私に呼びかけました。

ふと立止まって周囲の声・自然の声を聞き自分を見つめ直すことが多くなっています。

今年は嵩が、家の生垣の椿と梅の木枝に止まって、短い一声をたて尾羽をりんと飛び交う姿を見ました。

その鳴声は、日を追って二声、三声と音色が長くなり、やがて独特の高く澄んだ音色で、二羽・三羽と誘い合って静かな昼下りに、木立の中ひとしきり鳴き続けます。でも姿を見ることはありません。

夏の初めに、蝉が鳴きはじめる頃までその声を耳にすることが出来ます。そしていつしか消えて行きます。心なしかその声も年を追うごとに少なくなって行くように感じられます。

六月になると雨の降りそうな少しむし暑い日の夕方、川辺りの草むらの中から弱々しい蛍が一匹、そしてまた一匹と舞い出ます。

川岸や中州の草むらが、もしも梅雨の大水で流されてしまえば、その年には蛍の飛ぶ姿は見られないのです。願わくば今年もまた、蛍が群れて舞う光景を眺めて楽しみたいものです。

故郷への想いを漏らした

「蛍が見たい」と

六月に帰郷することのなかった者の切なる想いを、季節が巡ってくるたびに共に生きたよすがとして思い起すためにも……。

蛍が飛ぶ日の夕方には、土手の方から親子連れの話し声が聞えてきます。すると私は、あわてて庭の草花に水のしずくが落ちるほど水をまくのです。そして私は、田植を終えた水田の上をすれすれに、かすかな光のすじを描きながら庭に飛んで来る蛍を待つのです。

ちょうど庭に咲いているホタルブクロの花に蛍が入ってくれないかしらと……。

社の木立や住む鳥や虫や小さな草花に心を寄せ、耳を澄ませて年月を経て来た今、多くの人達に支えられて来たことを感謝しています。

探訪の会に加わり、福山の地で親友を得たことが嬉しいことです。

その年の十一月、七五三詣の奉仕を二人で力を合わせて済ませました。覚えていますか。ありがとう。

わだつみのいろこ（鱗）の宮

岡本　貞子

私がみずみずしい二十八の頃、ブリジストン美術館で、青木繁の大作「海の幸」と「わだつみのいろこの宮」を観賞した事がある。

「海の幸」はきびしい労働の中で、大らかに生きるよろこびを素朴に、力強くわが胸に訴え、「いろこの宮」の角髪姿は気品が漂ってくるような奥床しさで、当時の私を圧倒してしまった。

と、つい先日、月刊誌を読んでいて「わだつみのいろこの宮」という神域が、わが国西の端の遠く、対馬の海を見はるかす静謐な海辺にあるという文章を見つけた。その瞬間、はるか彼方を見つめている彼の眼差しがまざまざと甦ってきた。

神社の名は「海神神社」。ご神体として鱗状の亀裂のある岩が伝わっており、その写真も掲載されている。「わたづみ」の「み」は蛇とも龍とも表現出来るとしてあった。

われわれも先日、備陽史探訪の会で参加した楯築神社の「亀石」を拝見したばかりで、古代を思い巡らして驚いてしまった。まだ驚きは続く。ここは神社の宝庫なのである。

「和多都美神社」「阿麻底留神社」「住吉神社」「高御魂神社」…。

「伊奈久比神社」―これは鶴が稲穂をくわえて飛来し、この地に落としたので稲作が始まったとの伝説がある。

「多久頭魂神社」―これは「赤米神社」ともいわれ、弥生人が半島から赤米の稲作技術をもって対馬に渡来し、この赤米をもとにして土着の縄文人と共に二千年の丹精の末、現在の白米を生み出したとされている。それはまったく芸術的は労作であり、美味である。対馬の赤米は現在も、神社のある地域で、厳重なしきたりと伝承のもとに、神事として受け継がれ栽培されている。

又、和多都美神社は厳原という所にあり、湾の入口に鳥居が立ち、潮の干潮により海中に鳥居が望見出来る有様は、わが厳島と全く同じである。安芸厳島の社殿ほど壮大ではないが、共に「斎く島＝神に仕える島」という意味の地域の名は、同じ根源ではないかと思う。

この神社を少し南下した所に、豆酘という所がある。少し高台にあるこの地域は対馬島内でも特異な言語（方言）、風俗、習慣をもち、礼儀正しく、周囲から尊敬の念を持って敬愛されている所である。

古代には、地方豪族から大和朝廷に采女として差し出す習慣があり、豆酘の地もその例に洩れなかった。

当時、鶴王御前という美女が都より召されたが、親と別れるのを悲しみ、高台の峠で舌をかみ切って死んだという伝説がある。今もその美女塚があるそうな。目鼻立ちのすっきりした豆酘の人達は古来から混血を戒め、終戦迄、これが固く守られていた由。今、世界は一つのメディアの時代。これは古き良き時代の物語りであろうか。

最近、私の付近に対馬から嫁いでいらっしゃった若奥様に、豆酘という所の伝承について伺ったところ、次のように話して下さった。

「私が育った所とは少し離れておりますが、少し高台にあり、高校生でも気品のある方達でした。言葉も少し高音でした。その地域の方をお友達に持てた時は、とても誇りに思ったものです。礼儀正しい方達でした」

やはり本当なのだ。

環境破壊に染まっていない、静かな昔のままの対馬に、日本古代のふるさとがあるのではないか。日本の神々の源流が伝わっているのではないか。いつか備陽史の同志と訪れてみたい。

歴史民俗研究部会特別講座

『ふるさとの小祠の祭り』

歴史民俗研究部会主催の特別講座「ふるさとの小祠の祭り」をいよいよ開催いたします。

「加茂神社」宮司の石井良枝さんをお招きし、福山市加茂町近辺の小祠の祭祀について、左記の事柄を中心にお話しいただきます。

★年間を通しての祭り（例祭）の実状について
★祭祀儀礼の実際について
★荒神社の祭りについて
★加茂谷の「七年モウシ（催し）」の実際とその意義について
★「エエ（宵）ノモウシ」について
★「石割りの神事」について
★家庭および暮らしの中の神祭りについて

＜実施要項＞

日時　六月十一日（土）
　　午後六時三〇分
場所　中央公民館和室
講師　石井良枝さん
　　（加茂神社宮司）
費用　資料代実費（百円程度）

検地帳にみる近世農村の実態 I

出内　博都

水野藩が断絶したあと、幕命によって実施された検地とその御水帳は多くの町村に残っている。神石郡油木町の場合、殆どの旧村のものが役場に保管されているが、そのうち安田村の場合について紹介する。

安田村（現油木町大字安田）は、元和六年（一六二〇）には三七九石二斗五升と『備陽六郡志』にあるが、元禄十三年の御検地水帳では、〆五八二石一斗四升三合になっている。

田畑の等級・石盛は次のようになっている（以下の百分率は、田、畑それぞれに占める割合を示す）。

上々田　二町三反七畝四歩
（約五・五％）石盛　一石四斗
上田　六町九反二畝二〇歩
（約一六・一％）石盛　一石三斗
中田　六町五反一畝七歩
（約一五・二％）石盛　一石一斗
下田　一二町三反二五歩
（約二八・七％）石盛　九斗
下々田　一四町四反四畝二九歩
（約三三・六％）石盛　六斗
砂田　三反八畝五歩
（約〇・八％）石盛　五斗
上々畑　一町一反二畝二歩
（約三％）石盛　九斗
上畑　三町九反六畝二〇歩
（約九％）石盛　八斗
中畑　七町五畝九歩
（約一五・九％）石盛　六斗
下畑　一二町七畝一〇歩
（約二七・一％）石盛　五斗
下々畑　一八町二反六畝一六歩
（約四一・一％）石盛　三斗
砂畑　一町九反九畝
（約〇・四％）石盛　二斗
屋敷　一町七畝一四歩
石盛　八斗

これを備南の平地部の農村と比べてみると、石盛の低さ、等級別の田畑構成比において下級田畑の構成比が高いなど、気候・地勢上、生産性の劣悪状況が知れる。

たとえば、木之庄村では、
上々田（三八・八％）石盛一石六斗
上田（三二・六％）石盛一石四斗
中田　石盛　一石二斗
上々畑　石盛　一石一斗
上畑　石盛　一石

などとなっている。

安田村の屋敷数は九三戸あるが、このうち一二人が二戸もっているので、在村の本百姓は八一人である。このほかに、村内に屋敷のないものが一五名いる（ただし二件は寺院）。したがって土地所有名義者は〆九四名ということになる。

平均耕作反別は、田が四反五畝強、畑が四反六畝強である。しかし、その実態は、前出の構成比からみると、下田畑・下々田畑が三〇％以上あるので、実質生産高は、田で、下田の石盛九斗を平均として四石五升余、畑で、下畑をの石盛五斗を平均として二石三斗余になる。

石盛は一応課税基準で、実質生産高はそれより幾分高いとみても、天候その他の自然条件に左右されることもあり、米に換算した平均生産高は六石三斗余とみられる。

もちろん、畑で米は作らないが、石盛が米に換算されており、屋敷の石盛も米八斗になっている。

また、田畑・屋敷合計反別が八四町四反九畝一二歩で、その分米が五八二石一斗四升三合になっている。近世の場合、分米というのは石高に近い概念であるので、これが課税対象になる。

したがって、五公五民として二九一石七升一合余の年貢を出さねばならないことになる。米の全生産高は石盛を基準にすると、三九四石二斗七合程度である。

単純計算すると、一〇二石五斗六升が残ることになる。これを全耕作戸数九五戸で割ると、一戸平均一石七升九合余になる。

さて、田の耕地面積別の人数は概ね次のような構成になっている。

二反以下…二五人　ただし、他より
四反以下…二一人　の入作者を
六反以下…一七人　除き、田の耕
八反以下…　九人　作がなく、畑
一町以下…　四人　のみの者もあ
一町以上…　五人　るので、実数
計　八一人　は合わない。

右の如く、五七％に近いものが四反以下の耕作者で、実態をみると、一反未満のものが九人もいる現実である。

この実態の中では、年貢を一粒も出さなくても、家族が米を食べるなどということは夢物語りであろう。

実際には、この他に小物成として山年貢として銀四匁七分三厘と、薮年貢三七匁八分四厘を出さねばならぬことになっている。四木三草といわれる換金作物がどの程度作られていたかわからないが、銀を手にいれるのには米以外なかったと思えば、米は一粒も食べられなかったというのが真実の姿であろう。

『慶安の御触書』（一六四九年）に「一、百姓は分別もなく、末の考えもなき者に候ゆへ、秋に成候得ば、米雑穀をばむざと妻子にもくはせ候。いつも正月、二月、三月時分之心を

もち、食物を大切に仕るべく候に付、雑穀専一に候間、麦・稗・菜・大根、其の外何にても雑穀を作り、米を多く喰ひつぶし候はぬ様に仕るべく候」あるいは、「一、飢饉の時を存じ出し候得ば、大豆の葉、あづきの葉、ささげの葉、いもの落葉など、むざと捨て候儀はもったいなき事に候」の条文がすごい現実味おびて迫ってくる。

「むざと妻子にもくはせ」とか、「米を多く喰ひつぶし候はぬ様」などといっても、はじめから食べられぬ仕組になっていたのである。

飢饉の時を思い出さなくとも、いもの葉、豆の葉、更には山の木の葉も、百姓の常食であったのがいつわらぬ現実であったと思われる。

芋原「大すき」探索

小島　袈裟春

『備陽史探訪』第四二号に、芋原の「大すき」について現地に御住いのI氏と云う方の論文が掲載されて居て、『続日本紀』の養老三年（七一九）の項に記されて居る「備後国……茨城を停む」の茨城に比定出来るのではなかろうか、とあった。

私はそれ以来忘れた事はなかったのであるが、何せ、現地不案内で今まで見学の機会がなかったのである。

今回計らずも、当のI氏の御案内で探索が出来るとあらば、少々の体の不調など構って居れないのであった。

集合場所の龍田神社の前に、顔見知りのT氏が先着して居たので早速聞いて見た。

私「古代山城と云う説がある様ですがどんな構造でしょうか」

T氏「私も大分以前に一度見学しただけで良く分らないが、まぁ一種の堀の様なものですね。それに村の人達の間には〈昔巨人が住んで居て、村の廻りに溝を堀り、投げ捨てた土が神辺平野に点在する小山になった〉と云う、伝説があるそうですよ」

私「あゝそれは良い話ですね。私はそう云う話が好きだし、参考になります。その御話丈でも来た甲斐があります」・・・この伝説によって少なく共現住の方々の遥か御先祖まで、堀の造成に係わった形跡のない事が分かったのであった。

さて「大すき」は龍田神社の南、二百米程の山裾から始って居た。山の陵線に添った形で続いて居る。陵線の南は畑、北は雑木林、陵線から北側に四〜五米下って、幅二〜三米程、堀土を北に一〜一・五米程盛上げた形跡がある。それが東方向に百米程上って、四一二米の芋原の最高点に達する。頂上はかなり広く、平担な雑木林で、南端からの眺望は絶好であった。福山の海まで一望である。蔵王山など先の伝説の如く、本当に一掬いの土塊に見えた。北端には水道用の地下タンクとポンプ場が建設されて居て、工事で「大すき」の一部が攪乱されても居た。

思うにこの場所は城で云えば本丸に相当し、望楼を造れば村落内は勿論、三百六十度の警戒が出来る位置である。「大すき」は又陵線を東に下がり、バス道と小路の三叉路を越え、東向いの山陵に現われる。この様に「大すき」は、三つのピーク、二つの谷を越えて断続し、更に南に廻り込んで、芋原集落の大部分、約六十戸の人家と耕地を、東西約千米、南北約五百米の長円形で囲って居るとの事であった。無論この範囲は旧北山村の最良地であって『西備名区』に、五百二十余石と記す村高の半数以上を占める地域でもある。

さて、この「大すき」は何時、何の為に、誰によって造られたのであろうか。私なりの考察して見ようと思う（大きくは二説ある）。

一、茨城と考える。

前述の如く『続日本記』養老三年の項の比定であって「いばら、又はうまら」と「いもはら」との音韻の近似性を云うのであるが、何等かの遺跡が判然と存在するのは芋原のみで、他の候補地、福山蔵王山、岡山県井原市等は何もないのである。

又芋原「大すき」は環濠の一種であって、この付近では神辺の亀山遺跡の環濠に近似して居り、それが高地化して防御力を高めたもの、との見方も出来る。この場合は弥生時代との連続も考えられ、更に『日本書紀』の安閑紀の項、備後国……多爾屯倉に擬せられて居る「種」の地名も芋原の西北に近く存在し、又芋原の東に「小仁吾」の地名もある。事務局長の七森氏によれば「仁吾」は古代軍団に関係する、との説があるらしい。

この様な状況証拠をふまえて、七世紀頃の「茨城」は何を守る為か、と考えると、それはもう、加茂谷から神辺にかけての古墳、即ち初期・中期・後期に渉る群集墳の主達を、であろう。それは又同時に、その頃の国庁が神辺か府中か、と云う問題ともからみ合うのである。

尚「仁吾」と云う地名は備中、備後に比較的多い様である。

二、中世山城跡と考える。

天文二十年（一五五一）志川滝山城に宮氏一統が結集して、毛利軍と

最後の決戦をした時の山城跡との説がある（『西備名区』）。

その十七年前の天文三年、宮氏の本拠地新市の亀寿山城が、毛利氏を中心とする大内軍に破れて降服した時幼い当主、宮元範は叔父の志川滝山城主、宮兼光に預けられ、芋原を住居とした（『山野村語談記』世良戸城氏著）。又、同氏によれば、毛利氏に反旗を翻えした天文二十年、元範が本陣を構えたのも芋原であったという。

西の支えは志川滝山城、東の支えは上野城（芋原の東）ともあって、これは納得の出来る陣形でもある。

一般に云われる如く志川滝山城のみでは、何共心もとないが、前記の陣形であれば充分な勝算を持った決戦だったと思える。時間はあったのである。地形を充分に研究した事であろう。搦手の守りに堀切りを巡らす。それが今日集落北の陵線に顕著に残る「大すき」の姿かも知れない。

この時の戦いにおいて宮氏方は昼の勝軍の油断を衝かれた。毛利軍は夜襲を仕掛けたのである。前記の世良氏によれば、芋原、滝、種一帯は乱戦状態となり、酸鼻を極めた、とある。主将宮元範は身をもって備中に逃れた。一般村民は全滅したのであろう。

新しく入植した人達に「大すき」築造の伝承が途絶えた事も頷ける。

最後にもう一つ。「大すき」は近年まで村人は勿論、地域史家の間でも全く話題にされなかったが、十年程前、備陽史探訪の会が初めてアプローチし、以後注目を集める様になったと、同地出身のS氏から教えて頂いた。研究調査等は未だこれからなのである。その意味で、来年発行する予定の同会編集『山城探訪』の出版が期待されるのである。

第四回郷土史講座

『悪党について』

「一三世紀末から一四世紀へかけての歴史的変動の中で、特異な存在として歴史の舞台に出た『悪党』と称せられる集団とは一体何物だったか。この集団の中に、何が歴史を動かす力として働いたのか。その辺りを追及したい」と講師の出内さん。

できるだけ「備後における悪党」という形でお話しいただきます。

〈実施要項〉

日時　五月二八日（土）
午後一時三〇分

場所　市民会館会議室

講師　出内博都さん

費用　資料代実費（百円程度）

耳に新しい呪文たち

匿名希望　QH@A7RB

歴史が特に好きという訳ではない。それでも、歴史を知らない者は知らないなりに、史跡の見学を楽しんでいる。ところが、どうも意味と音が合体してくれないのだ。

「さんかくぶちしんじゅうきょう」は長くて、まるで呪文だ。これを聞いて、すぐに「三角縁神獣鏡」という文字を結び付け。さらに、博物館ではいつも模様のある裏を見せているあの丸い鏡を思い浮かべるのは、なかなか大変なことなのだ。

「とくしゅきだい」なんかは「特殊…」で既につまづいて、何と比べてどこが特殊なのかさっぱりわからない。単なる土の筒の様ではないか。

仏像が好きな人なら、すぐにあの姿が目に浮かんでくる「はんかしゆいぞう」も尊い像を知らなければ、どんな漢字をあてはめればいいのかなという事に気を取られてしまう。ロダンの「考える人」の方がよほどわかり易い名称だ。

そんな訳で、歴史の世界は、現代のカタカナ語文化に勝るとも劣らない、ナゾの呪文の世界なのだ。「例会は、アカデミックでミステリアス。イージーでリーズナブルなイベント」などと言っている場合ではない。

呪文のナゾ解きをするには、漢字や絵や写真、そして何よりも実物を目にするのが一番だ。

願わくば、講師の先生方、カナではなく漢字と絵で話して下さいませんか。口を開けば絵が飛び出してくる…。空也上人でも口からアミダ様は出てきたけれど、絵は出なかったから、無理な注文ですね。

野外での話では、せめてポイントになる用語は、漢字か絵などの大きなカードでも見せて下さると、呪文のナゾもあっと言う間に解けるかな？

★特殊器台は初期の古墳に立てられた焼物で、埴輪の原形。左は岡山県真備町の黒宮大塚古墳出土のもの。

半跏思惟像

三つ柱鳥居

熊谷　操子

太秦にある〝かいこの社〟の本殿の西側に、注連縄を張ったこちんまりした神明鳥居が見えた。それを潜ると、私はわけもなくサイドの髪毛を気にしたり、ハンドバッグを持ち変えたりしながら自然に早足になっていた。

「なにをそわそわしてる」と、もう一人の私が囁きかけてくる。まさに、乙女の頃のあの胸のときめきそのものである。目の前の石段を五、六段降りると、しっかりした新しい竹垣があった。私はすぐそれにぶら下がるように、また張りついたようにして薄暗い森の中に目を凝らした。

「あった。あった」やっと念願の三つ柱鳥居に会えたのだ。

「やっとお会い出来ましたね」と、心の中での私語は、ちゃんと初対面の挨拶をしていた。

三つの石の鳥居が両手を真横に上げて、掌と掌を繋いだような奇妙な姿である。神秘的というか、不可思議というか。なんと表現してよいかその言葉を知らない。誰がいう、どのような気持でこの鳥居を、この湿地に建てたのだろうか。私は、特徴ある何種かの鳥居を見て来たが、こんな感慨を覚えたのは初めてだった。

「ここにはね、いつも奇麗な水が湧いていて二段の池になっているんですが、今日は水がありませんね」と、背後から声がした。垣にぶら下がるように食いつくようになってる私の異様な恰好に、熟年の男性はそう教えずにはいられなかったのだろう。全然水は無かったので、それを知らない私は池の中にいたわけだ。道理で落葉が沢山重なって足許がいやにふわふわしているなとは思った。

これがいつか読んだ〝元糺の池〟そう思いながら慌てて位置を変えたこの神池は身滌の行場であり、土用丑の日に、ここに手足を浸すと、諸病にかからないという俗信仰もある。日本で唯一の、この石造三つ柱鳥居を見たい見たいと思いながら、十年もの間念願を温めていた。それは四条大宮で京福電車に乗り換えるという、ただそれだけの面倒さに、その近くまで行っていながら、ついつい「また今度」を繰り返していた。

駅名は〝蚕の社〟明神鳥居が民家の屋根にガブリと食いつき、ジグソーパズルの一角を見るようで、そのユニークさに思わずカメラを構えた。ささやかな商店街を五分ほど歩くと、〝木嶋坐天照御魂神社〟という長い碑に出会う。その台石に、老婆が二人腰を掛けてのんびり話している。その傍の低い碑には〝蚕神社〟と彫ってある。二つめの鳥居の側では、三人の女性の、井戸端会議ならぬ鳥居端会議の真最中である。参道では

「お婆さん、お元気どしたか。ようお参りやしたなあ」

「へえおおきに。今日もまたお参りさせてもらいました」と、これまたのんびりした会話である。朔日とあって繊維に携わる人達が商売繁昌を祈って帰るらしい。ちょうど魂のふる里みたいな心安い神社である。

拝殿の側に〝文化十四年。西陣、縮緬仲間〟と彫られた石碑があった。「縮が一つ多いのでは……」と思いながら、幼い頃、

「ちんちりめんの被布着せて」とねだった事をふと思い出し、江戸時代には縮緬の事を〝ちぢみちりめん〟と言うたのかしら等と他愛もないことを考えたひとときであった。

本殿の屋根は桧皮葺きかしら。祭神は、イザナギ・イザナミの祖先である〝天之御中之主神〟外四柱の神で、創建年月は不詳であるが、勿論式内社である。天照という名から想像するのに、太陽神として五柱の神を祀っていた古からの神社であろう。

秦河勝が、聖徳太子から弥勒菩薩を受けて、蜂岡寺を建立し、それを秦氏の氏寺とする。これが後の広隆寺になることはあまりにも有名である。同じ頃、東接するこの神社をとり込んで養蚕の神として敬い、秦氏の氏神にしたと伝えられる。渡来して来た日本で彼等が機織部として生き抜くために、この社を心の寄りどころにしたのも頷ける。本殿の東側にその蚕の社がある。

帰り際に気づいたところによると、二つめの鳥居をくぐったすぐ左側に稲荷鳥居があった。その奥に小さな祠が五つひしめき合っていた。農業技術者でもあった秦氏が、真剣に、〝イネナリ〟をも祈ったものか。

京都と言えば、雅な平安王朝の文化がすぐ頭をよぎるが、五世紀に、もはや渡来していた新羅系氏族の秦氏が〝禹豆麻佐〟という姓をもらい、ここを新世界として、先進的な文化を深く根強く伝統づけていたのだ。それらが築いた基礎の上に、現在の京都の繁栄の歴史が居座ったのだ。

謎の三柱鳥居をやっと見ることが出来た喜びと、この小さな神社に詣でた事によって、太秦の歴史をあらためてかみしめることが出来た喜びが交錯して、今、身体中を駆け巡る。

心ふるえた京のミニ旅であった。

ひとり旅

佐藤　秀子

因縁浅からぬ…とよく言うが、私には最近そういう事がよくあって、考え事をしたり仏教書を読むことが多くなった。夜行バスに乗った日は中華航空の事故。九年前の深夜、眠れなくてつけた旅先の宿のテレビからは全日空機事故のニュース。旅に出た日は不思議の始まり…。

京都国立博物館で特別展の人混みを早々に抜けだした私は、常設展をどうしようかと迷っていた。名戸屋博物館でみた尾形光琳の風神雷神図、そして今から行く大阪出光美術館の酒井抱一の風神雷神図の屏風、この二点の原本の国宝の宗達の屏風は近くの建仁寺にある。多分見せてもらえないだろうけれど、宗達画の七、八十年後、そして光琳画の百十余年後に描かれたこの三点の屏風の目に見えない、いのちのつながりを寺に行くことで私は、はっきりと確かめたかったのだ。

今は十二時過ぎ、早くしないと大阪へ行けない。目の前の三十三間堂をちらっと横目でみる。行きたい所はここにも…。けれど、せっかく来たのだからやはり見よう。階段をかけ上がる。「ふう」二階は私の好きなものばかり。言葉も出ない幸せの広がり。

仏像……釈迦の十大弟子のうち阿難陀は、聖徳太子の二才の時の像にそっくりで法隆寺展で見たものも博物館で見たものも作者は違う筈なのに、きりりとした総明な御顔なのだ。仏画…「仏眼仏母（ぶつげんぶつも）」あらゆる事象を認知する仏の眼力を人格化した尊像。白くてきれいな仏像である。その横、三幅は国宝である。無造作に…といってもガラスのケースの中だが、例えば骨つぼだとか経箱だとか衣服…あらゆるものが国宝でその点数の多さにびっくりしてしまう。仏像や軸の多さは名古屋とは比べものにならず、東洋館だけしか見られなかった東京国立博物館も、京都の質の展示には多分、負けてしまっているに違いない。

「あれっ」正面の屏風を見た時、私は複製だろうと思った。まさか…と思って近ずいてみた。国宝、風神雷神図、俵屋宗達、まぎれもない本物である。三百五十年を生きながらえて光琳や抱一の若さを歯牙にもかけない大きくゆるぎない自信。絵が昇天して神になった。人間が描いた平面が立体になってこころを持ってゆく様をずっと見守っていた収納室。彼と話をしてみたいとつくづく思った。本を読んで感動はする、涙もでる、けれど本は無色ですよね。絵の色は私達の感性を呼び覚まし、陶酔をひきおこす。仕事をやめて二週間、二十館近くまわった美術館や博物館。私一人しかいない空間で、古文書や掛軸のささやく声に耳傾けながら、至福の時を過ごしている。

昭和十五年秋、まだ恩賜京都博物館と呼ばれていた時に、宗達、光琳、抱一の屏風が一堂に展示されたそうである。私はまだ生まれていなかったが、会員の方の中で見た方がいらっしゃればお話を聞きたい。

今回、絶対見られないだろうと思っていたのに建都千二百年の特別展示で私にこの喜びを与えてくれたのは誰だろう。何年か後、再び三人の屏風が心ある人の企画で会することがあれば、一番心ふるわせるのは屏風に宿る作者の情念たちであろう。

博物館で東洋美術の研究をしているニノ・ピーターノリィさんと知りあった。そして明治時代の画家、渡辺省亭のことを調べているとの事。帰宅して十時過ぎ、知人の画商に頼むと古画辞典で調べてくれた。すぐその概略を聞いて、手紙を書きかけたが、旅行中に配達された芸術新潮に、渡辺省亭の絵と略歴、画業が一ページに紹介されていたのである。私は唖然としてしまった。偶然とは思えなかった。楽しい。帰りの車中で見た平岩弓枝の老鬼の読切小説は丸亀に幽閉されていた鳥居耀蔵が明治になって二十三年ぶりに東京へ戻ってきた事を書いたもので、旅行出発の日に発売されたものである。

先日、さよ子さんと出かけた福山城でも丸亀出身の人と出会いしかも叔父と同じ会社を退職した人だったのである。福山で同郷の人に会ったのは二十二年間で初めて。次々続く小さな幸せに私は増々考えこむようになり、雑多な本の山が、部屋のあちこちにできてしまった。

姪の寮に泊まった翌日、金沢文庫に出かけた。ちょうど特別展をやっていて、黒を基調とした闇と静の館内は私一人。低い定温の書物の呼気は何の香り？大切に守られてきた巻物の断簡、それに和歌集の残闕、ここにしか現存してない稀覯見本。知らないことを教えてもらうことの楽しさ。一人でゆっくり歩く気兼ねのない旅。そして東京から名古屋への車中で知りあい、祖母への愛情に溢れたデッサンを下さった宏美さん、「お母さん、晩カレーでいいかい」と枕を並べて寝た息子。思い巡って夜が明けてしまいました。

謎多き原史・歴史時代

柿本 光明

伝説には、どんなものをとりあげてみても、それ自体に長い発生と発展の歴史がある。神武・綏靖以下、わたくしたちが使いなれている天皇の名前は、奈良時代の末か平安時代のころに、まとめてあとからつけられた中国式のおくりなであって『古事記』や『日本書紀』にしるされているのは、日本式の名前である。神武天皇は神日本磐余彦天皇（『日本書紀』）としるされているので、イワレヒコ（磐余彦）とよぶことにしよう。イワレヒコの伝説にも、もちろん長い歴史があったと考えなければならない。その長い歴史の最後の仕上げは、きっちりとした紀年の付加である。これは『古事記』にはみられず、『日本書紀』にだけみられるものであるが、それらの年紀のなかで最も重要なものが、即位の辛酉の年（西暦紀元前六六〇年）であった。

この辛酉の年が、中国から伝えられてきた讖緯説によってつくられたことは、すでに江戸時代の学者によって気づかれていたことであるが、明治時代になってから、さらにはっきりとした説にまとめられた。それによると、辛酉の年に革命が起こるといっても、その辛酉がひとめぐりしてくる六十年をさらに二十一回つみかさねた千二百六十年（これを一蔀という）が最も重要な切れめだとする説があり、これによって、イワレヒコの即位の年は定められた、というのである。計算してみると、すぐにわかることだが 聖徳太子が摂政として活躍していた推古朝の辛酉の年（六〇一年）から千二百六十年さかのぼると、イワレヒコ即位の辛酉の年が出てくる。だから、この紀年をつくりだしたのは聖徳太子ではないか、という説が出てくるわけである。しかし、これを修正する説もある。これは暦の研究によって出てきた説であって基準となる辛酉の年をもう六十年さげて、天智天皇の称制の年である六六一年だとする説である。どちらとも決めることは困難であるが、あとの説のほうが、よりスムーズに理解できることが多い。

イワレヒコが実在したかどうかという疑問は、皇室系図の古い部分が信用できるかどうかの疑問につながってくる。それはまた、『古事記』や『日本書紀』の資料的価値の問題にも繋がっているわけである。『古事記』や『日本書紀』に書かれていることを、事実として認める人はすくなくとも歴史を科学として研究している学者のなかには、一人もいないはずである。

このことは、天皇の名前（中国式のものではなく、日本式のもの）をすこし注意してみただけでも、うなずけるところである。いわゆる大和闕史時代の八人の天皇は、どう考えても、あとから（『古事記』『日本書紀』の編集に近いころ）つけられた名前としか考えられない。たしかに古めかしい名前は、第十五代のホムダワケ（応神天皇）からである。それ以前の天皇については、どうにも確かめようがない。だからイワレヒコも実在の天皇とはみとめがたいと考えておくのが、学問的に正しい態度だ、といわなければならない。『日本書紀』にもしるされている畝傍山東北陵があるではないかと、いう人もあるかもしれないが、皇陵もあてにはならない。いま、歴代の天皇の御陵は全部はっきりと定められているが、これらの多くは、江戸時代になってから、新しい調査と推測にもとづいて定められたもので、皇陵があるから実在したと即断することは、とうていできないのである。

神武天皇から数えて第十代目の崇神天皇は日本式のおくり名を御間城入彦五十瓊殖天皇というので、略してミマキイリヒコとよぶことにする。

前にも述べた奇妙なことは、第一代のイワレヒコと第十代のミマキイリヒコとのあいだには、八人の天皇がいるわけであるが、イワレヒコとミマキイリヒコには、これまで述べてきたように、ともに詳細な業績がしるされているのに、あいだの八人については、皇都・皇妃・皇子・皇陵など、ほとんどなにもしるされていない。このため、この八代を大和闕史時代などとも呼び、何かの理由でこの八代の歴史がなくなったのだと考えられたこともあった。が、いまでは、この八人はもともとなかったのを、あとから挿入したのだ、と考えるのが普通となっている。

では、この八代を除いて、前後のイワレヒコとミマキイリヒコのことだけは事実と考えてよいのであろうか。じつは、それにも疑問がある。

また、第二十六代の継体天皇は、もともとの名を男大迹天皇といい応神天皇の五世または六世の孫とされているが、この天皇の即位については、『日本書紀』によると、前の武烈天皇がなくなったあと、畿内には皇位を継ぐべき皇子がいなかったので、大連の大伴金村らが、越前の国にいたオオト王を捜しだし、天皇に

立てたことになっている。

このオオト王はもともと皇室とは関係のない越前国の豪族であって、それが大和朝廷の内乱につけこんで越前国から乗りこんできて、みずから天皇になった、すなわち新しい王朝を開いたのだと推測している人さえいる。ところで、さらに不思議なのは、このオオト王は河内の樟葉宮で即位してから、山背の筒城宮、同じく弟国宮を転々として移りあるきようやく大和にはいって磐余の玉穂宮に落ちついた。これは地方の豪族が大和へ攻めこむための侵入の経路を示すものと考えられる。

このオオト王の大和への侵入経路はイワレヒコの大和への侵入の経過とくらべてみると、いくつかの共通点に注目し、イワレヒコの東征伝説は、オオト王の大和侵入の事実をモデルとして考案されたものであろうと推測した（イワレヒコという名前とイワレの皇都との関係には、とくに注意してよいであろう）。その時期は、おそらくオオト王の記憶がまだ薄れてない時代として、欽明朝あたりまでが考えられる。

伝説というものは、なんらかの歴史的事実があって、この歴史的事業を核としてでき上がってくることがよくあるからである。

もちろん、歴史的事実のないところに、まったくちがった原因から、架空の伝説ができてくることもあるから、簡単にかめてかかることは、非常に危険である。

忠臣蔵

―正月の時代劇鑑賞記―

種本　実

正月は例年、妻が子供たちを連れて実家へ帰るので狭い家でもゆったりと過ごせる。ゴロリと横になって、好きなテレビ番組を深夜まで見ることができるのも、正月ならではのささやかな楽しみである。

元旦の夜は、実家で両親と夕食をとりながら六時から始まった「大忠臣蔵」を見た。新聞でこの番組を知ったときは「何だ。又忠臣蔵か」と思い、別に見る気はなかった。映画は見ていないがNHKの大河ドラマ「赤穂浪士」「元禄太平記」他で何度も見たり、読んだりしたこの物語はいささか食傷ぎみであった。

だが、時代劇が大好きな父に正月ぐらいはゆっくり付き合おうかと、民放が嫌いな母が寝床へ去った後も二人で見続けた。その内にいつの間にか引き込まれ、途中我が家の炬燵に帰ってからも、一人で最後まで見てしまった。

分かりきった粗筋ながら、五時間がさほど長いとも思えず結構楽しめた。ただ折角の大作に水を差すがごとく、やたらにCMが入るのは民放とはいえいただけない思いがした。最近、CMの回数や時間が多くなったと感じるのは私だけだろうか。

見ごたえがあったのは、脚本もさることながら俳優が好演だったことに尽きる。主演の松方弘樹は大石内蔵助を彼なりの渋い持味で演じたが、以前毎週演じていた〝遠山の金さん〟のと同じ口調がほんの少し耳についた。とはいえ、城代家老として残務整理、城明け渡し、と責任を果たし、さらに血気にはやる同志を抑制しつつも結束を固めながら、必ず本望を遂げるべく、慎重かつ用意周到に行動する内蔵助をよく演じていた。

なかでも、討ち入りの前夜瑤泉院を訪ね、最後の別れを交わす場面は胸に迫るものがあった。「さる西国の大名に仕官することになりました」と、いちるの望みを打ち砕く言を受けながらも瑤泉院は内蔵助に手縫いの頭巾を与え、「身体をいたわれよ」と労う。しかし、「殿のお位牌に最後のご焼香をお許し下さい」と願う内蔵助に、「それはなりません。殿がお喜びになるとは思えぬから」と、席を立ちながら凛として言い放つのである。

内蔵助は「江戸への道中に詠んだ和歌にございます。瑤泉院様にご覧に頂きますように」と言って、四十七士の血判状の巻物をお側の者に渡し去る。夜中に、小者に化けた吉良の間者がこの巻物を盗もうとするが、とり押さえられ瑤泉院は内蔵助の本心を初めて知って涙する。数ある名場面のひとつであり、目頭に熱いものが込み上げてくる。

江戸急進派の筆頭だった堀部安兵衛を演じた役所広司や、内匠頭の不興を被り浪人の身となった不破数右衛門を熱演した夏八木勲もよかった。不治の病で時折口から血を流しながらも内蔵助を警護する日々。ついに念願かなって義士に加えられ、槍の使い手を十分に披露して見せた。時代考証のうえからは、フィクションが多々あることはともかく、脚本や俳優によっては何度見ても新鮮な感動が湧き起こるドラマである。

唯一点気がついた場面。内蔵助の長男主税が、離婚して実家の豊岡に住んでいる母と最後の別れをして江戸へ旅立つ場面で、主税は左手に網笠を持ち、刀は右手で持っていたように見た。これではいざという場合、刀を持ち変えることになるから逆ではないだろうか。

父を知らない三男大三郎は、後日母と共に広島の浅野家へ迎えられたが、三度も離婚した揚げ句、淋病を患い母を残して他界したという。内蔵助と主税の栄光に比べて、広島で世を去った母子二人は、この事件のお陰で不遇を被った吉良家をはじめ、多くの人々同様哀れである。

映画全盛の昔から、不景気になると忠臣蔵が上映されると言われてきた。「昭和元禄」から一転した平成の大不況のまっ只中の今年の元旦に「大忠臣蔵」はうってつけだったのだろうか。来年の正月はどんな時代劇が見られるだろう、今から楽しみである。

〈エピローグ〉

時代劇が好きだった父ですが、三月十七日に脳梗塞により、突然永眠しました。悲しみに浸る間もなく、慌ただしく葬儀を済ませました。後の様々な処理に追われ、記念すべき六〇号の会報にもかかわらず、このような拙文を事務局にお届けしてしまいました。

会員の皆様の、日々ご多忙の中を会務に研究に、励まれている姿には敬服しています。

自己研鑽の一端として、テーマをもって皆様の後を学んでゆきたいと考えています。

研修旅行

香港・マカオの旅 旅程編

後藤 匡史

以前、冗談で俺の海外旅行は隠岐島じゃと云っていた。それと云うのも、前、勤めていた会社の慰安旅行で隠岐島に行ったのが話の種である。行きは鳥取県の境港からフェリーにて三時間、帰りは隠岐空港から二十分間の旅である。

それが此の度、香港・マカオ研修旅行に行かせてもらい、正真正銘の海外旅行となった。

平成五年五月一九日、二〇日、二一日、二二日の三泊四日の旅である。

九時四五分大阪発、日本航空通称JALで飛び立って空路目的地に向かう。途中、台湾の台北上空を通過する。ここで昔、父が若い頃砂糖工場で働いていたと話していたことを、懐かしく思い出した。

一二時半頃、香港に着く。

香港島を観光。

夜は水上レストランで夕食をとる。素晴らしいビクトリア・パーク、あの有名な百万弗の夜景である。

二日目は、九龍半島中国側の情緒ある街で買い物をする。

そして、ここで研修旅行のメインである、香港現地企業「アビオネット香港リミテッド」見学となった。

夜はビクトリア湾ディナークルーズで食事。夕食後、女人街の観光。

三日目はポルトガル領マカオである。

ここではセント・ポール天主堂を見学する。一七世紀初めに日本人キリシタンの協力で建てられたと云う。前壁が残るだけの建築物だが、青空に天を突く姿は他を圧倒する。

ここから中国中山県にある、あの中国革命の父・孫文の生家へいった。良く整備されていて、その近くに孫文を記念して中学校が建てられていた。

ここでの昼食は中華料理が山盛り。夕食は香港に戻ってレイユームンにて海鮮料理に舌鼓。

開けて二二日午後の出発まで自由行動。ホテルのロビーにて雑談にふける。いよいよこれで日本に帰るのか思うと、名残惜しい気がした。

しかし、観光でホテルの部屋を出る度に、枕の下に二弗（日本円にして三〇円）置かねばならず、又、レストランや公園での御手洗いも二弗。とに角何でも使用すれば銭をとられるのは、日本と大違い。本当に日本程住み良い所はないと思った。

ただ、日本も戦後五〇年をへて、経済大国と自画自賛して来たはずなのに、去年の冷害で米が不足すれば、列を作って買いあさっている。戦後間もない頃の、三度の飯を二度にするというような状況はありえないのに、人々の心の貧しさが何とも皮肉である。

いよいよ、ホテルから空港へ出発、そして一路大阪空港へと向かう。

機内では、食事にデザートといたせりつくせりであった。行く時もそうだったが、それまで持っていたスチュワーデスと云うイメージが全然違っていた。乗降時は制服でスカッと決めているけれど、機内でのエプロン姿の軽装は、お客をなごやかにしてくれる。

そうしているうちに大阪上空。降りる準備に取りかかろうとして機内の窓から下をのぞくと、その時、機体が一気に旋回…。

何と地上あちらこちらに前方後円墳が見えた。そのうちで一番大きなあれこそ、世界最大の仁徳天皇陵…。ああ…これこそ今度の旅の最高の収獲であった。こうして三泊四日の研修旅行は終った。

一句

春飛行
東支那海波静か
夢は広がる香港の旅

（歴史・文化論編は次号へ掲載）

近江の国より備探の皆様へ

末森　清司

「備陽史探訪の会」の皆様お元気ですか。御無沙汰しております。

去る三月六日、末森例会では大変お世話になりました。参加された皆様、頭崎城城跡や御園宇城跡いかがでしたか？一寸きつい山登りになってしまった様でしたネ。

例会終了後の慰労会、ゲキレイ会は又々多くの方々の参加で盛り上がり、大変楽しく、うれしかったです。皆様にはげまされ、大いに気を良くしております。

私は、三月末日をもって二十五年有余勤めた会社を身体をこわした為に退職し、四月一日より近江国へ来ております。

勤務先は「車体整備技術振興会」で、この職員兼「ボデーリペア技術研修所」の塗装講師として再出発しました。

一寸先のことは解りませんが、働けば働く程身体をむしばんでいく前の職場より、研修所の講師、それも自分の技術が一応活かされるこの仕事が良いのではと思って決意しました。

研修所に就任してから少しずつ気分も高まり、精神的にもしっかりしてきました。まあ、ボチボチ身体に気をつけてやっていきます。

三原からは一寸遠いので通勤する訳にはいかず、仕方なく住居を職場の近くに定めました。寸づまりの3DKのアパート、我が家から比べると何ともせまくて…。

住居はJR東海道線米原駅に近く、徒歩七分という所ですが、まわりは田んぼ、ホントに田舎。米原駅は機関区があった所で、駅は大きいのですが、町は田舎町。三原が都会に見えます。

ところが、ここは交通の要所。京阪神、名古屋へも近く、北陸にも便利ですヨ。彦根、長浜は車で十分余りです。

そしてこの地方は、日本史に登場する有名な史跡がいっぱい。私にとって大変楽しみなところです。ひまがあれば、片っぱしから歩いてみようと考えてはおりますが…。

まあ、仕事が仕事だけにそうはいかないと思っております。

先日、夕方ひまをみて彦根城を見学、天守台郭より見た夕日がすごくきれいでした。瀬戸内とは一味違った美しさが見られます。琵琶湖ってこんなに広いのか、と湖岸道路を車で走ると感じております。

彦根城を見て佐和山城を見ない事には話にならないとばかり、夕方、二時間ばかり駆け足で登ってみました。その遺構は根こそぎ壊され、石垣の石ひとつ残っておらず、無残でした。わずかに曲輪、土塁、井戸が残るのみ…。でも、その遺構はやはり立派です。佐藤の錦士さんが見ると、ヨダレを流して喜ぶ山城の遺構が見られ、さすが石田三成の居城跡と、私はひとり夕やみのせまる二の丸近くの女郎ケ谷の曲輪で想いにふけり、当時を偲んでおりました。

彦根の地、石田三成の事はすべて徳川時代より抹消されているのかと思いましたが、さすが三成、立派な治世をひいたとみえ「三成公」と言って地元の方はその徳を今でもしたっておられます。

その証しとして、彦根市内各所に「石田地蔵」が祭られ、線香の煙が絶える事が無いとの事。地元の老人会で、郷土史のグループ「鶴寿会」の副会長をされている田中さんと知合い、お話をお聞きすると「石田地蔵」その数は数百もあったとの事。三成公によせる住民の思いが根強いのにおどろいております。

今四月十七日、湖北は桜満開です。備探の皆様方と花見が出来なかったのは心残りです。

もっとも医師より「お酒駄目」と言われて禁酒しておりますが、それでも同好の志と一杯という思いは相も変らず強いのです。

勤務がおちつきましたら、この地方の山城探訪記を会報にのせます。

もうひとつ、とびっきりの山城専門家と知合いになりました。米原町社会教育委員の中井均氏です。戦国の城郭についてものすごく良く知っておられ、雑誌・専門誌に多くの論文を書いておられます（田口会長はご存知でしょうね）。

「ぜひ気軽に事務所（町の役所内にある別棟に二人で勤務され、町の文化財の調査・発掘をやっておられます）へ来て下さい」と言われ、大いに気を良くして「是非指導して下さい」とお願いしております。

イヤァ～人生行くところ同好の志が居られ、楽しみな事と一人喜んでいます。唯々、ちいと中井氏は専門的なので、私や錦さんの様にホイホイと馬鹿を言ってホラを吹くという具合にはいかぬ様に思います。

やっぱり同好の志は、私には錦さんがぴったりの様です。

「オーイ錦さん、米原へ居を移せや」てな事を時には思います。一寸横道へ話がとんでいく様なので…。

勤務先、住所を記しておきます。

自宅は一応「備陽史探訪の会近江支部、又は米原支部」ということにしておきましょうか…。

会の皆様一人一人にあいさつ状をと思っておりましたが、郵便料金がものすごく高くつくし、第一、わがフトコロ、スッテンテンの為、会報にてゴカンベンをお願いします。

気楽にお便り、電話を下さい！

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会

個人情報が含まれるため
掲載できません。

以上です。

会の皆様お元気で、今後とも宜しくお願いします。

薙刀と私

杉原　道彦

私の家の長押には、薙刀が掛けてあります。十数年前までは、神石郡三和町の生家のオディと呼ばれる客間の長押に、掛かっていました。艶のない墨のような色をしたこの長押の上段には、申し訳なさそうに竹刀が乗っていたのですが、その昔は、槍が掛かっていたらしいのです。

この薙刀は、私の祖父から数えて四代前の甚右衛門の妻、須恵が持参したもので、兄の森井武右衛門は安那郡東中条村の庄屋を務めておりました。

須恵は文化十一年（一八一四）生れで、長男の友治を三十二歳で生んでいるので、天保期に嫁入りしたものと思われます。夫の甚右衛門は名を鶴造と言い、神石郡父木野村の釣頭を務めておりました。

この釣頭は、庄屋や組頭の下に位置し、各村には庄屋一名、組頭（年寄とも言う）二、三名、釣頭四、五名の割合で配置され、年貢の賦課徴収などを取り扱い、村役人と呼ばれていました。

甚右衛門の弟幸左衛は、長崎で医術を学び、後に幕府の御典医を務めています。

さて、甚右衛門は三十四歳の天保十三年（一八四二）に、突然村払いを小畠陣屋から申し渡されました。身に覚えのない沙汰に憤りをおぼえつつ父木野村を後に、義兄の森井武右衛門宅に身を寄せたことが、『村払い一件文書』から伺い知ることができます。

当時の父木野村は豊前国中津藩の飛び地領で、小畠に代官所を構えていました。代官は村田藤右衛門で、小畠の大庄屋から代官所に取り立てられた家柄で、享保二年（一七一七）から明治に至るまで十四代にわたって続いた在地支配の一翼をになっていました。

村払いは所払いとも言い、居住地への立ち入りを禁止される追放刑で、この種の刑のなかでも最も軽微なものなのですが、原因は庄屋の不正を甚右衛門に負わせる為に村役人たちが仕組んだ事だったのです。

この村役人の中には、伯父の年寄役孫三郎、同釣頭長蔵がおり、庄屋の歩一郎とも親戚関係にあたり、言わば身内の喧嘩とも言うべき争いであったようです。

村払いから十年後の嘉永五年（一八五二）に冤罪を晴らすため、甚石衛門は幕府へ願書を提出しました。当時の住まいは江戸下谷金杉一丁目で、弟の御典医杉原孝斎に相談したうえでの判断でした。

家に残された須恵は、母や妹タケ、子供などと留守を預かっていたのですが、農作業の経験は全くないことから作人に頼っていたようです。村払いに関する古文書も数多く残っていますが、一方的な記録だけであるので、事件の真相は今後の調査にかかっています。子孫としては美談にまとめたいのが本音です。

私が十数年前に現在地に転居したのは前述の通りですが、以前ここに住んでいらした方の納屋が残っていましたので整理していたところ、偶然、古文書を見つけました。

和綴の表紙に「安政二卯年、中津行萬日記、宗元十兵衛」と記した旅行日記でした。中を開いて見てもほとんど判断できないのですが、どうやら甚右衛門に関係あるらしいのです。

そこで、芦田町の河村洋先生に解読をお願いしたところ、快く引き受けてくださり、忙しい中、一箇月で解読して頂きました。

読んで吃驚しました。甚右衛門の妻の須恵が、妹のタケとともに、中津藩庁へ出向いたことが記してあったのです。不思議な巡り会わせと言う他ありません。

その後の調査で前に住んでいた方が、宗元十兵衛の分家にあたることも判明しました。これも因縁なのかも知れません。

甚右衛門が幕府に願書を提出してから三年後の安政二年（一八五五）に、中津藩庁で吟味を行う旨の呼び出しがあり、父木野村から総勢二十

数名が出向いたことが判明しました。須恵たちが旅立つ時、水盃を交わしていたことから、命がけの旅であったことがうかがえます。

これが江戸中期から各地で発生した「村方騒動」と呼ばれるもので、そのほとんどが村役人の不正を訴えた事件であったようです。

この事件の結果から言えば、甚右衛門はお咎めなし、庄屋の歩一郎は入牢となり、拷問がもとでその年に死亡し、村方騒動は終わったのです。

甚右衛門は帰村を許され、元のように百姓として暮らし、七年後の文久二年（一八六二）になくなりました。須恵の方は明治六年（一八七三）に亡くなりました。五十九歳でした。

長男の友治がこの時相続したものは、田畑二町歩、山林十五町余りであったことが、当時の名寄帳から判ります。なんでもない片田舎でも平々凡々に暮らしてはいけなかったようです。

機会があれば、豊前国中津を訪ねてみようと思っています。出来れば、『中津行萬日記』の道程を通って。薙刀を見る度にそう思います。

ところで、最近の話なのですが、某家蔵の家系図を拝見する機会がありました。その中にどういう訳か、私の先祖である寛永年代の平佐太郎兵衛の名前が出て来て、これ又偶然と言うか嬉しいような、何か訴えかけられているのではないかと感じています。

ちょっと思い過ごしかも知れませんが、そう思うことにします。

中世を読む会

『備後古城記を読む』

日時　六月一八日（土）午後七時。
以後も毎月第三土曜日に開催。
場所　市民会館会議室
（今回は中央公民館ではありません）
座長　出内博都（城郭部会部会長）
費用　千円
（既にご購入の方は不要です。テキスト＝原文コピー）

『中世を読む』発刊！

城郭研究部会の機関誌『中世を読む会』第三・第四合併号が二月六日出版されました。

掲載論文は、田口義之「高須三郎左衛門尉景勝について」、出内博都「南北朝期における山内首藤家について」など四編で、力作揃いです。

頒布価格は一部千円。購入希望者は事務局までご連絡下さい。

酒井勝軍と日本ピラミッド

東田　東国

庄原ピラミッドの名は以前から耳にしていたが、新手の村おこしか、あるいは神武天皇聖跡地の如く、有名人を無理やりわが地元に引っぱってくる類のものだと、ずっと思っていた。

だって私は由緒正しい探訪の会の会員だもの。友人には篤実な考古研究者も多いし、そんないかにもいかがわしそうなものを、お口に入れる訳にはいかないではないか。

ところが、去年暮に行った庄原例会の時聞いたところでは、このピラミッド説を唱えたのは酒井勝軍という東京の（つまり地の者でない）学者で、おまけに彼には『太古日本のピラミッド』の著作があるという。我然興味がわいてきたが、手がかりがない。こういう時私は即、物識りのT氏にTELすることにしている。「ねえねえ酒井勝軍て人知ってる？」「あー庄原ピラミッドのね、あんまり詳しくないけれど、簡単に言うとエジプトのピラミッドの原型は日本にあったはずだと主張して、実際に探した人だよ。庄原以外にも二、三ケ所ピラミッドだという所を見つけてるんじゃないかな。まー在野の異端学者といったところかな。ただ、彼の主張のひとつに〈日本ーユダヤ同祖論〉というのがあって、これは一寸アブナいのよね。まーあんまり深入りしないまうがいいと思うよ。ほっほっほ」

うーん初手から危険な匂い。これはやっぱり『太古日本のピラミッド』を読んでみなくっちゃと図書館に行ったが、無い。戦前の本ならたいがい揃ってる国会図書館に照会してもらったが、やっぱり無い。後に知ったところでは、酒井のこの本は出版直後発禁処分になったという。なるほどそれじゃ無いのも当然。

文献からアプローチする方面はしばらく置いておこうかと思ったら、意外や意外。日本ピラミッドを扱った本はその辺の本屋にゴロゴロしているんですね。ほら、例のノストラダムスがどうしたとか、ムー大陸がどうたらとかいうあのコーナーですよ。その名も『日本ピラミッド超文明』『日本超古代遺跡の謎』などなど。さっそく三冊ほど買う。多少気恥ずかしいものあり。

これらの本は共通して酒井勝軍の思想・業績に多くの頁をさいている。特に、酒井が庄原ピラミッドを発見するくだりは細部まで一緒で、ネタ

本の存在を示している。

おそらく『太古日本のピラミッド』という本は、庄原ピラミッド発見の報告書（それも紀行文に近い形での）といった内容のものではないかと思われる。仲々味も素っ気もある素敵な話なので、少々長くなるが、大要紹介しておきたい。

昭和九年三月のことである。京都でピラミッドの講演をしていた酒井のもとに、聴衆の一人広島在住の梅田寛一という人が訪れ、耳寄りな情報をもたらした。

「私の郷里に先生に話に合う様な山があるかもしれません。帝釈峡の近くにあるその山には頂上に人工物らしい巨石が数多く並んでいるそうです。実はその山、三〇年程前に神武天皇の御陵ではないかとの噂が立ち、それなら宝のひとつもあるだろうと、村の若者が総出で堀ったところ、いくら堀っても巨大な切石で石垣の様に築かれているので、遂にあきらめてしまったそうです。巨石には意味不明の文字のようなものが刻まれていたということです」

話を聞いた酒井は、これこそ自分の探し求めていたピラミッドに違いないと考えたが、梅田も自身そこに行った訳でなく、村上馬太郎という人からのまた聞きであると言うので、まず、この村上という人を探そうということになった。幸い酒井には府中に堀隼衛という志を共にする知己がおり、この人の奔走で村上が呉ケ峠村にいるということが確認された。

かくして酒井は四月二二日府中着、翌朝、堀と二人で呉ケ峠を目指した。

急な訪問を受けた村上は、何しろ三〇年前のことを急に問われたので、最初全く要領を得なかったが、長い詰問の末ようやく大体の場所を思い出した。詳しくは比婆郡本村（庄原）役場で聞いてもらえば解るということであったが、二人はまず東城町へ。東城で堀の友人、地元の地理にも明るい土肥の同行を得て、車はやっと目的地へ向って走り出した。

この間不手際が目立つ。

時刻はすでに午後二時。気は焦るが、昭和初期の田舎道は車を飛ばす様にはできてない。一行がやっと目的地付近に着いた時にはもう四時をまわっていた。今から役場まで往復する時間はない。その辺の農夫にでも聞けば解るだろうとタカをくくったのが大間違い。とんちんかんな答えに引きずり回され、さらに時間を空費するはめになった。

結局、このあと偶然通りかかった「四〇歳前後の紳士」のおかげで、一行はやっと葦嶽山（庄原ピラミッド）を目指すことができたのだが、折りから降ってきた雨の中。案内人を探すため奔走してくれたこの紳士が、どこのだれであるのか全く記述がない。余程精神的に余裕がなかったと考えられる。

（ここでふと気がついたが、この原稿を書いている今日は平成六年四月二三日。奇しくも酒井一行が悪戦苦闘しているこの日である。今日も雨が降っている。午後六時といえば、もう薄暗い。えーっ、これから山のぼるのーといった感じだが、彼等はのぼるのである。現在でこそ葦嶽山は道の急なところなど、階段状に整備されているが、当事は人跡未踏。後に酒井はこの日のことを「思い起すもゾッとする難儀であった」と書き残している。そりゃあそうだろう）

山頂には異様な風景が広がっていた。まず眼をひくのが三基のドルメン。さらに登ると右手斜面に屹立するおよそ五Mはあろうかという石柱。これももとは何本も立っていたらしく、倒壊した残骸がそこら中に散乱している。その手前には三M×五M程の表面の平らな巨石（酒井は鏡石という）。自然現象とも思えぬ正しく十文字に亀裂のはいった方位石、メンヒルも数基立っている。

自分の予想の余りの正しさに酒井は狂喜した。

「ここは自分の考えてきたピラミッドの拝殿跡に違いない」

順序が逆になったが、ここで酒井のピラミッド理論を要約しておく。

①ピラミッドとは整然とした三角形の山を言う。これは自然物であっても人工であっても一向にかまわない。エジプトは山がないので石材を積んで人工の山を作った。

②ピラミッド頂上には「太陽石」と、それをとりまく方形・円形の磐境（いわさか）がある。

③ピラミッドは本殿と別に拝殿を要する。

④この拝殿には、方位石・鏡石・ドルメン・メンヒルが設置されてある。

断っておくけど、この理論は酒井が葦嶽山の存在を知る以前に、エジプトのピラミッドの研究から割り出した「将来、日本でピラミッドが見つかるとしたらこういうものであろう」という仮説なんだよ。葦嶽山を見た後で言ったのなら見たまんまじゃないか。

さて、酒井理論によるなら、この拝殿とセットになった本殿が近くにあるはずであったが、もう周りはす

っかり暗闇で、依然降り続ける雨に加えて雷鳴まで聞こえ出した。

「残念だが、今日はこれで中止にしよう」と帰り始めたその時、一条の閃光が闇を裂き、一行の眼前に正しく三角形の山のシルエットが浮かび上がったのである。酒井は思わずこう叫んだと言う。

「諸君、彼の山こそまさにピラミッドである！」

うーん何度読んでもこのくだりはいいねえ。まるでTVドラマの一場面のようである。

さて、第二回目の調査。本殿の発掘は約一ヶ月後、五月二八日に衆人環視のもと行われた。なぜ「衆人」がそんなにいたのかというと、ピラミッド発見の事実が中国新聞にスクープされたためで、現地はまるで観光地。あれ程苦労して登った登山道はすっかり整備され、茶店までできる（さすがに「ピラミッド饅頭」はなかったが）というおもしろさ。これにはさすがの酒井もあっと驚いたのであった。

この日の葦嶽山山頂の発掘調査では、酒井の予想通り、円形太陽石とそれをとりまく二重の磐境が発見され、酒井はこれを約二万三千年前、神武天皇以前の王朝によって築かれたピラミッドであると、正式に発表したのである。

ちなみにこの太陽石は今はない。伝えるところに拠れば、酒井のピラミッド理論の波及を恐れた（特に神武以前の王朝というのがよろしくない）国家権力が、葦嶽山を入山禁示にした上、ダイナマイトで遺跡を破壊してしまったからだそうである。

でも、これはちょっとマユツバ。確かにこの時期の日本では宗教弾圧がかなり行われている。大本教の第二次弾圧は昭和一〇年だし、翌年には大本教の神殿は本当にダイナマイトで破壊されている。でも、葦嶽山の場合そこまでやる必要が、そもそもあるであろうか。

確かに山頂には、太陽石があった（らしい）。それらは何らかの宗教遺跡・太陽信仰の跡としてもいい。でも太陽信仰なんてものは、エジプトに限らず世界中どこでもある。山容が美しい三角形であれば、人をして尊崇の念を起させることもあろうが「超古代」は知らず、歴史時代にはそれは「神体山」して信仰の対象となってきたのだ。当然拝殿はあってもよい。

鳴り物入りではあったが、少し冷静に考えれば、この調査発掘で日本ピラミッドを証拠だてる指標はひとつもないりである。中国新聞だって現在ならこんなことを記事にしないだろう。

酒井は何故日本にピラミッドがなければならぬと考えたのだろうか。この問いに答えるためには酒井の略歴なりともふれておかねばなるまい。

酒井勝軍はもと牧師であった。中学の時洗礼を受けた彼は、その後仙台神学校、アメリカ留学を経て、当時としては珍しいエリート牧師としてキリスト教会に新風をまき起こす。この時期の酒井の信仰に特徴的なことは「贖罪」思想の軽視であるという人もいる。「贖罪」が本来の意味を失い、キリスト教共同体に属することで精神の平穏をのみを求める風潮を彼は痛烈に批判し、アクティブな信仰集団として「賛美奨励会」を組織する。この団体は後「国教宣明団」と改称される。

大正七年のシベリア出兵に彼はその語学力を買われ二度目の従軍の任につくが、この間に「反ユダヤ主義」の洗礼を受け、帰国後『ユダヤ民族の大陰謀』等の反ユダヤ論陣をはることになる。

しかし、昭和二年、ユダヤ研究のためパレスチナに赴いた酒井は、何故か一転「親ユダヤ主義」となり、帰国後「日ユ同祖論」を展開し、同時に「日本にピラミッドは存在する」と主張するようになる。

普通このパレスチナ行をもって彼の大きな思想的転回として、彼の地において酒井は何らかの「秘密の書」の様なものを見て自分の従来の説を捨てたのだ、その「書」なるものにはきっと日本ピラミッドの存在を証明するものが書いてあったに違いない、という人もいるが、自身で物事を考えたことのないもののたわ事である。私の見るところ反ユダヤであれ、親ユダヤであれ、酒井の思想は少しも変っていない。

『日本ピラミッド超文明』にはちょっと面白い酒井のエピソードがのっている。大正三年頃のこと、酒井は家人と共に夜の散策を行っていたところ、中空の月に暗雲がかかり、「⊕」のマークを描き出すのに遭遇した。○は日の丸。＋はキリストの象徴である。この時彼は、世界大動乱とハルマドゲンの近いこと、そして日本民族が近い将来においてメシアの再臨と神政復古の使命を果すことを確信したという。

「ユダヤ民族の陰謀」による世界の破局と、メシアとしての日本民族による世界の再統合・支配、メシアたるの資格としての「日ユ同祖論」と「古史古伝」への没入。これは一風変った帝国主義ではないのか、と

問うことはこの余りにも真摯で熱情的な（彼は昭和一五年七月、岩手県五葉山の調査中に他界した。終生現役、まさに前へ前へつんのめる様に斃れたのである）一民間学者に対して失礼であるかもしれない。それに、どんな人間も時代の支配風潮からそんなに自由であれるはずもない。

しかし、日本ピラミッド研究が純粋考古というよりは、理想とか願望とか希求とかにより多く依拠してあったということは記憶しておいていいのである。

HOT NEWS

熊谷操子さん

ふくやま文学選奨準部門賞受賞

福山文化連盟・福山市教育委員会主催の、第十八回ふくやま文学選奨「川柳部門」で、われらが熊谷操子さんが準部門賞を受賞されました。

今回、受賞の対象となった作品は次の見事な三首です。

あきらめの風抱きしめて輪廻とや
この橋を渡れば悔いるかも知れず
足許を見忘れていた仮分数

熊谷さん、本当におめでとうございました。

津山例会締め切る！

名無し葉書は誰ですか？

新たに例会参加受付開始日を設定

「水無月の津山を味わう旅」に多数のご応募ありがとうございました。

四月二二日、定員五四名に達し、締め切らせていただきました。

その後も応募は増え続け、四月末日現在、一五名のキャンセル待ち状態です。そこで、お願いがあります。

既に申し込まれている方の中で、**都合で参加できなくなった方は、できるだけ早くその旨事務局までご連絡下さい。**順次、キャンセル待ちの方にまわしていきたいと思います。

なお、四月二四日付の申し込み葉書が一通とどきましたが、名前がありません。締切り後でもあり、受付になっていません。当日いらっしゃっても参加できません。お心当たりの方は事務局までご連絡下さい。

それからもうひとつ。

一部会員の方から、バス例会の締切りが早すぎていつも参加できない、との苦情がありました。

そこで、例会の参加受付開始日を余裕をもってとり、会報・案内等でこれを明示し、それ以前の申し込みは受付けないことにしました。

皆様のご協力をお願いいたします。

新入会員紹介

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会

個人情報が含まれるため掲載できません。

（四月三〇日現在）

事務局日誌

◎山城調査については別項参照。

二月一九日（土）『小早川家文書を読む』最終回。会報59号発送作業参加七名。ともに於中央公民館。

三月五日（土）郷土史特別講座『義倉創立の志』講師・立石定夫先生。出席二五名。汁粉に舌鼓を打つ。

三月一九日（土）役員会。出席九名。第一回『備後古城記を読む』開催。座長・出内博都城郭部会部会長。ともに於中央公民館。

四月二日（土）第一回『古墳講座』開催。講師・網本善光古墳部会副部会長。出席七名。於中央公民館。

四月九日（土）『行事案内』発送作業。参加四名。於中央公民館。

四月一六日（土）

第二回『備後古城記を読む』開催。

四月二三日（土）第三回郷土史講座『福山の古墳』開催。

講師・網本善光古墳部会副部会長。出席一七名。於中央公民館。

五月二日（月）第一二回『親と子の古墳巡り』打合わせ。出席八名。於中央公民館。

五月五日（木）第一二回『親と子の古墳巡り』実施。参加一三〇名。NHKのテレビ取材も入り、大成功！

『山城探訪』発行
第一期調査終了

備陽史探訪の会創立一五周年を記念して出版する『山城探訪』のための第一期調査が四月一七日（日）終了しました。

調査は、矢繰城から始まり、続いて、青ケ城、阿草山城と調査が行われ、戸屋ケ丸城で今期の調査は終了しました。なお、調査は秋以降も継続されます。

第一期山城調査日誌

①一／一六（日）矢繰城、丸山城
（参加＝九名、担当＝出内博都）
②一／三〇（日）青ケ城
（参加＝一〇名、担当＝出内博都）
③二／一一（祝）阿草山城
（参加＝一〇名、担当山口哲晶）
④二／二〇（日）近江城、殿奥城
（参加＝一一名、担当＝出内博都）
⑤二／二七（日）赤柴山城
（参加＝一四名、担当＝七森義人）
⑥三／一三（日）淵上城
（参加＝一三名、担当＝杉原道彦）
⑦三／二〇（日）折敷山城
（参加＝八名、担当＝網本善光）
⑧三／二七（日）陶山城
（参加＝九名、担当＝網本善光）
⑨四／三（日）的場城、銀山城
（参加＝七名、担当＝出内博都）
⑩四／一〇（日）芋原の大スキ
（参加＝一五名、担当＝平田恵彦）
⑪四／一七（日）戸屋ケ丸城
（参加＝八名、担当＝山口哲晶）

第五回郷土史講座

『古代の祭式と須恵器』

古墳時代中期以降に日本で生産された陶質の土器―須恵器。

この技術が朝鮮半島からの渡来人によることは『日本書紀』の「垂仁紀三年」の条などで明らかです。

ろくろの使用、巻き上げ・叩き締めの技法、登窯による還元焔での焼き上げなどの特色をもつ、灰青色の色調の土器。

古代の祭式と密接に結びついていた高坏や鳥形土器なども須恵器で作られていました。

この須恵器について研究した成果を中心にお話しいただきます。

＜実施要項＞

日程　六月二五日（土）
時間　午後一時三〇分
場所　中央公民館会議室
講師　山口哲晶さん
費用　資料代実費（百円程度）

HOT NEWS　歴史講演会

渋川氏と杉原氏Ⅱ

三原郷土文化研究会主催による、歴史講演会「渋川氏と杉原氏Ⅱ」が開催されます。講師はわれらが田口会長です。

内容は二月一三日の「渋川氏と杉原氏」の続編。中世史・郷土史ファンは絶対に聞き逃せません。

＜実施要項＞

日程　六月一二日（日）
時間　午前一〇時～正午
場所　三原市立図書館
☎〇八四八（六二）三二二五
講師　田口義之会長
費用　無料

会報六一号の原稿募集

『備陽史探訪』六一号（八月末発行予定）の原稿を募集します。

歴史論文、短歌、俳句、例会参加報告、紀行文など内容は問いません。

次号は八頁の予定です。

字数は「氏名とタイトル」は別で、本文を「タテ一六字×九〇行」以内で書いて下さい（厳守！）。

原稿締切りは七月末日です。

『山城志』第12集原稿募集

今年度発行の『山城志』第12集の原稿を募集します。

原則として、日本史・郷土史に取材した論文、随筆、紀行文、小説等ですが、あまり厳密に考えてはいませんので、気楽に投稿して下さい。

字数は四〇〇字詰め原稿用紙一〇枚程度です。締切りは七月末日。

原稿の送り先は『会報』『山城志』とも事務局宛てです。

編集後記

記念六〇号いかがでしたか？

予想以上に原稿が集まり、編集部は嬉しい悲鳴。『備陽史探訪』過去最多ページ数の号になりました。

それにもかかわらず、紙面と予算の関係で、出内さん、後藤さんの原稿は分割させていただくことになりました。また、網本さんの「親と子の古墳巡りレポート」も次号にまわさせていただきました。この場を借りてお詫びいたします。

今回の大盤振るまいで、次号は緊縮予算になります。あしからず。

備陽史探訪の会事務局
〒七二〇　☎（五三）六一五七
福山市多治米町五―一九―八